

元暗殺者提督と艦娘と の物語

ヴェル提督

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

暗殺者であるヴェルが最後の依頼を受け、暗殺者をやめ、提督になり、癖のある艦娘達との物語

目次

プロローグ	1
海外から来た人物	4
鎮守府の方針	8
ヴェル提督と艦娘	11
提督の過去（前編）	16
提督の過去（後編）	21
新たな試み（前編）	27
新たな試み（後編）	34
試験演習	39
試験演習結果	47
閲覧可能な資料 1	52
鎮守府の名前	55

提督の本来の姿	61
提督の本気	67
ブラック鎮守府侵入任務&艦娘救出作戦	72
提督と不思議な夢	83
先輩との出会い	90
提督の強運（笑）	97
ガイロット作戦	103
提督の強運（マジ）	116
提督と大和	122
提督と大和のその後	128
大和の過去	135
提督襲撃事件	144

デルタチーム崩壊の元凶

トラウマとの再対峙

トラウマとの決着

—

—

—

174 167 153

プロローグ

最後のブラック鎮守府から、極秘資料を盗み出すと言う依頼から5年がたった。そして、僕は愛車のランエボと、響と皐月と一緒に配属される鎮守府に移動している最中である。

響「顔が、強ぼっているよ。大丈夫かい？司令官」

ヴェル「元がブラックだったから、少し心配してる。汗」

皐月「う〜ん確かに、提督に関してはあまりいい印象はないと思う。けど司令官なら大丈夫だよ！」

ヴェル「そう言ってくれれば、安心するよ。」

そうこうしている間に鎮守府に着き、司令室に行く通路で、まだ僕は緊張していた。

ヴェル「あく心配」

響「いい加減腹を決めたらどうだい？」

皐月「そうだよ、その方が楽だよ！」

と、話している間に、司令室の前に来てしまった。

ヴェル「あーよし。」

響「緊張が和らいだようだね。」

皐月「さあ、また緊張が来る前に入っちゃお！」

ヴェル「よし行くか」

「三人共」「失礼します。」

そう言つて、僕達は司令室の扉を開けた。

加賀「……（ヴェルの顔をじつと見つめる）良かった、優しそうな方で、」

ヴェル「そうかな？」

響「そうだよ。彼はとても優しい人で、頼りになるさ。」

ヴェル「や、やめてくれよ、恥ずかしいじゃないか／＼」

皐月「そうだよ。提督さんはとても優しく、かつこいい人だよ！」

ヴェル「皐月まで／＼」

加賀「ふふ、三人共とても仲がいいですね。」

ヴェル（良かった、みんな僕を怖がらないからここでは、よくやって行けそうだよ。）

僕の口角が上がる。

響「どうしたんだい？司令官。」

ヴェル「ここだったらみんなと仲良くやって行けると思つたら楽しくなっちゃつて。」

皐月「良かったよ！司令官。これからよろしくね。」

ヴェル「ああ、みんなよろしく！」

こうして、僕はこの鎮守府の提督になった、これからどうなっていくのか楽しみだ。

【人物説明】

ヴェル：暗殺者だったが、ブラック鎮守府の依頼以降、暗殺者の幕を閉じた。そして眼帯をしている、その理由は、昔の任務で、味方に裏切られ目を負傷した、それを隠すために眼帯を付けている、目を負傷した際に記憶障害を起こしその時から妖精が見えるようになった。暗殺者で、あったため銃の整備ができる。愛車はランエボ

響：初期艦がいなかったため急遽配属された駆逐艦、クールで、頭がよく切れる。

皐月：ブラック鎮守府に配属される予定だったが、丁度ヴェルの任務と被ったため、配属が遅れた。

加賀：ブラック鎮守府に配属していた、正規空母、前提督の秘書艦だったが、正直、彼のことは嫌いだった、ヴェルに任務の依頼を任せなかったが、外に出る事ができないため、大本営に依頼した。彼女のお陰で、今の鎮守府がある。

海外から来た人物

僕がこの鎮守府に来てから、数日が経とうとしているとある日。

ヴェル「う、うーっ、あゝ」

と、情けない声を出して、伸びをする

吹雪「司令官さん、お疲れ様です！」

と、吹雪が、お茶を出してくれた。

ヴェル「あ、ありがとう吹雪。」

吹雪「いえいえ、秘書艦として、当然の事です！」

ヴェル「そう言えば、今日あの人があるんですよね。」

吹雪「はい！」

ヴェル「何時くらいだっけ？」

吹雪「確か、ヒトサンマルマルでしたよ。」

ヴェル「あと、1時間ありますね。よし、ちよつと僕は射撃場に行きます。吹雪さんはお迎えの準備をしてください。」

吹雪「はい！わかりました！」

吹雪はそう言つて司令室を後にした。

ヴェル「さてと、外に出る為に結構長い、廊下を歩かなくてはならないけど面倒臭いんだよねえ。もう、ラペリングで、降りるか。」

ヴェル（我ながら結構イカれているな）

そう思いながら僕はロープを出して、ラペリングをして、外に出た。

ヴェル「いやゝすごく、活気が戻ってきた気がする。」

そう言いながら、僕は射撃場に向かつて歩いていった。

ヴェル（艦娘の管理はずさんなのに、こう言う設備は、完璧に管理しているんだよなあ。）

そんな事を考えながら、僕は愛銃の U S P t a c t i c a l を構えた。

ヴェル「懐かしい、そして、少しだけ怖いな。」

そうして、僕は的に向かつて3発放った。銃弾は的の真中を捉えている。

ヴェル「まだまだ現役かな？」

1時間後

ヴェル「やばい、正門に行かなきゃ！」

そして、僕は正門に走った。

吹雪「あ、提督さん！待ってました。」

ヴェル「やっぱり、予想が当たったかな？」

??? 「さすが、私の後輩、久しぶりだな。」

ヴェル「ああ、久しぶり。シロナ先輩」

シロナ「もう酷いよヴェル君、いつからそんな冷たくなったの？」

ヴェル「僕は元々結構冷たい性格だからな。」

吹雪「あの、、」

ヴェル「あ、ごめんごめん 紹介するね、僕の先輩のシロナさん、今日憲兵として、雇われたんだ。」

吹雪「よろしくです！シロナさん！」

シロナ「ええ、よろしくね。吹雪さん」

↳ 【人物紹介】 ↳

シロナ・ネロ：ヴェルの暗殺者時代の先輩で、見た目が、結構モデル体型だが、その見た目とは裏腹にデザートイーグルや、対物ライフルを操る。すごいパワフルな一面を

持っている

吹雪：ブラック鎮守府に所属していた、駆逐艦。少しトラウマを持っているが、今はそのトラウマを乗り越えている。

鎮守府の方針

ヴェル「うゝゝん、はああ」

涼月「提督？どうしたんですか？そんなに大きなため息をついて。」

ヴェル「あ、涼月さん実は、演習の結果についての書類を見ていたんだ。」

涼月「あんまりよろしくないのですか？」

ヴェル「ご名答、その通りだ。多分まだ、みんなトラウマがあるんだろう。とてもぎこちないからね。このまま、演習で、みんなに負担しかないし、何より、僕が皆から反感を貰うというのが一番怖いからね。」

響「大丈夫さ。」

頭上から響の声がする。

ヴェル&涼月「うわあ！びっくりした。」

響「驚かすつもりはなかったんだよ。」

ヴェル「そうか汗所で響さつき大丈夫って言ったのは根拠はあるのかい？」

響「あるさ、確かに演習では、みんなぎこちないけど、前のような、どんよりした空気が無くなっているからね。そうだろう涼月？」

涼月「ええ確かに、あなたがここに来てからとても変わりました。」
ヴェル「・・・」

涼月「なので、提督の方針にみんな従ってくださいよ。きつと・・・」

ヴェル「ありがとう、2人とも！気が楽になった。」

響「それは良かった。」

ヴェル「じゃあ僕は今からみんなに伝えてきます！」

そうして、僕は放送室に走った。

響「彼は本当に仲間思いだね。」

涼月「そうですね、でもその方がいいですよ、私たちにとつても。」

響「ああ、それは違うない」

そう話していた時、スピーカーから提督の声が聞こえた。

ヴェル「みんな、この鎮守府の方針が決まりました。この鎮守府では、海域に出撃せず、演習をメインで、行いたいと思います。理由は、提督が5年いないというスランプを埋めるためです。今のままで、海域に言つては轟沈は避けられないでしょう。僕はみんなを海の底に沈めたくない。だから、戦闘の感覚を戻せるまで演習を行います。以上！」

響「彼は本当に仲間思いだね。」

涼月「ええ、とても仲間思いのいい人ですね。」

話をしていた時に提督が走ってきた。

ヴェル「ありがとう2人とも！お陰で僕の言いたかったことを言えたよ。」

2人とも「どういたしまして。」

——その日の深夜——

ヴェル「クソ、目が少し痛む。何故だ、」

僕は原因不明の目の痛みに悩まされていた。あまりみんなの前では言っていないがここに着任する前からずっと定期的に目が痛くなっているのだ、

ヴェル「最近、その周期がだんだん短くなってきた。クソ、このままじゃあ、、」
その時目の痛みが収まった、だが、彼らは知らないこの目の痛みがその後とんでもない、作戦を行うという事に共鳴していると言うことを。

ヴェル提督と艦娘

ヴェル「そういえばふと思ったのだけど。」

僕はそう言つて秘書艦の明石さんに質問した。

ヴェル「僕を最初見た時つてどう思ったの？」

そういうと彼女は、

明石「また、怖い提督が来たと思ひました。」

そう答えた。シヨックじゃあないと云えば嘘になる。

ヴェル「そつか、そうだよね、いきなり銀髪的眼帯をした人が来たら怖いよね。」

そう僕は言つた。實際僕の顔を見て恐怖を抱かなかつたのは響だけなのだ。そう思つた後明石さんは

明石「正直、ずっと工廠に閉じこもつてようと思ひました。あなたのことを知るまではですけど。」

そう返してれた。

ヴェル「そう、それは良かった。でも、やつぱり怖がられる事はよくあるんだよね。」

主に電とかに。怖がられるんだよねえ。ははは」泣

明石「あはは汗」

ヴェル「はあ、どうすれば怖がられなくなるかな？」

明石「うーん難しいですよねえ」

ヴェル「やっぱり、この眼帯が怖いのかな？」

明石「そうだと、思います。ちなみになんですが、提督は何故眼帯をしているんですか？」

ヴェル「・・・」

明石「提督？」

ヴェル「すまない、眼帯の事は聞かないでくれ。」

明石「・・・わかりました。」

私はその時直感的に感じた、彼の眼帯の話はとんでもない過去があると言うことが。

ヴェル「すまない、助かる」

明石「いえ、こちらも聞いてはいけけない質問をしてしまいましたね。」

ヴェル「いや、大丈夫だ、いずれ話す事になるから・・・」

そう僕が言い終えようとした時、

???「きやーーーーー」

ヴェル&明石「！」

ヴェル「今の悲鳴は、駆逐艦寮の方からだ、明石さんはここにいて！僕が見てくる！」

明石「あ、ちよつと提督！」

バタン

明石「全く、いい人すぎるわよ提督。」

駆逐艦寮

雷&電「いや、こないで（なのです）」

変質者「えへへ、いいじゃんおじさんといい事しようよ」

ヴェル「おい、そこで何をしている。」

雷&電「司令官！」

変質者「なんだテメエ、俺とこの子達の邪魔をするなあー!!」

そう言つて、変質者が僕に迫ってきた。

雷&電「司令官危ない！」

変質者「喰らえ！」

そう殴られそうな手を掴み、ドアノブを捻るように右に捻った。

変質者「いでででで、悪かった俺が悪かった許してくれー！」

ヴェル「今すぐ、僕の前から消えてくれ。」

そうして、変質者は憲兵によって連れて行かれた。

ヴェル「2人とも大丈夫だった？」

そう言つて僕は片膝をついて、優しい声で聞いた。

雷&電「怖かったよ〜泣」

そう言つて、2人は僕に抱き着いてきた。

ヴェル「よしよし、もう大丈夫だよ。安心して。」

僕は彼女達を安心させて、司令室に戻った。

数日後

電「あ、司令官さんおはようなのです！」

ヴェル「やおおはよう電さん」

電はそう挨拶をして、寮に戻つて行つた。

ヴェル「前より、みんな怖がらなくなつたな。」

そう零すと、

明石「みんな、提督が優しいってことをわかつたんですよきつと。」

ヴェル「それは嬉しいな。」

明石「じゃあ私は、工廠に戻つて作業の続きをします。提督じゃあね。」

ヴェル「じゃあね、明石さん作業頑張つてね。」

そう言つて彼女を見送つた。

ヴェル「さてと、僕も頑張りますかね。」
そう言つて僕は司令室に向かつて歩いていった、
ある事を考えながら。

ヴェル（さて、いつ話すか、俺の過去について）

続く

提督の過去（前編）

ヴェル

「はあ、まだこんなにブラック鎮守府があるんだろうかね。」

外のベンチに座り書類を見ていた。

???

「仕方ないよ、艦娘を奴隷や、道具として見てない人がいるからね。」

僕の後ろから可憐な声が出た、僕が振り返ると

ヴェル

「シロナ先輩。」

僕の前輩だった

シロナ

「そんな悲しい声を出さないでよ、私まで悲しくなっちゃうじゃない。」

ヴェル

「ごめん、でもやっぱり僕はみんなの事が好きだから、うーん」

そう唸っていると、シロナ先輩がとんでもない事を提案してきた。

シロナ

「じゃあ、いつその事その鎮守府を制圧しちゃう？あの時みたいに。」

ヴェル

「何言ってるいるんだ！俺はもう引退した身だ！もう、」

僕は彼女の言葉について血が上り強い口調で言ってしまった。

ヴェル

「あ、ごめん、つい」

シロナ

「いや、私も悪かったよ。」

そう言っ僕はベンチを立ち、司令室に戻った

ヴェル

「また、あの時みたいになえ…。」

僕は司令室のクローゼットの中にある、黒いコートを見ながらそう呟いた。

ヴェル

「いや、僕はもう引退した身だ、もうあの頃には戻らない。」

そう言っ僕はクローゼットを閉じた。

ヴェル

「もう、あんな辛い思いはしたくない。」

そう小言を残して。

——その夜——

ヴェル

（ここは何処だ？）

僕は夢を見ていた。二度と見たくないと思っていた夢を

ヴェル

（また、この夢かもう見たくない。嫌だ。嫌だ。）

だが、夢は僕を嘲笑うかのように進んでいく。

ヴェル

（嫌だ、見たくない、これ以上は見たくない。嫌だやめろ。）

——現実——

ヴェル

「やめろ……もう……やめてくれ……」

響

「れい……か……ん、しれいかん、司令官！」

その声で夢はやっと終わった

ヴェル

「ハアハア、もう、嫌だ。なんで、こんな夢を見るんだ。」

響

「司令官、大丈夫かい？すごい汗だけど。」

そう響に言われて、僕の体が異様に濡れているという事に気づいた。

ヴェル

「ああ、大丈夫だよ、ちよつと嫌な夢を見ていただけさ。」

そう響に言った、だが、

響

「司令官、話して、司令官の過去や眼帯について」

そう彼女に言われた

ヴェル

「・・・」

響

「お願い司令官、もう苦しんでいる司令官を私は見たくない。だから」

そう、彼女は泣きそうな声でそう言った。

ヴェル

「わかった。」

そう頷いた。

ヴェル

「だが、この話は辛い物だ、それでもいいんだね。」

そう彼女に問いかけると、彼女は

響

「大丈夫。」

そう彼女は言った。

ヴェル

「でも、これは響1人では聞かせられない。最低でも5人は必要だ。」

響

「わかったよ、司令官」

続く

提督の過去（後編）

涼月&皐月

「提督大事な話ってなんですか？」

そう彼女達に聞かれた。

ヴェル

「大事な話って言うのは、僕の過去についてだ。」

そう僕は言った。

涼月

「過去ですか？例えばその眼帯の話と言う事ですか？」

彼女の問いかけに僕は頷いた。

ヴェル

「まず、僕は暗殺者だった。そしてある任務ある場所で俺は片目を失った。」

吹雪

「その場所ってどこなんですか？」

そう彼女は聞いてきた。

ヴェル

「皆も名前なら聞いた事はあるかもしれない。難攻不落の絶対孤島要塞【地獄・インフェルノ】」

全員

「・・・」

ヴェル「そして、それは起こった。」

数年前

ヴェル

「こちらデルタチーム、ヴェルだ。こちらのチームは全員生存これより帰投する。」

大司令官

「了解、今回もよく頑張ってくれた。全員ヘリで脱出しろ。」

ヴェル

「了解、ヴェルアウト、皆ヘリで脱出するぞ。」

デルタチーム

「了解」

ヘリに着いた俺はある光景を見た。

ヴェル

「おい、嘘だろ…」

そこにはパイロットの死体があった。

???

「悪いな、君たちが生きていると報酬が減るんでねえ。」

そう声がして、振り返った。その瞬間バンと銃声が出た。

デルタ1

「がはあ」

デルタ2

「ぐはあ」

仲間が殺されていた。

ヴェル

「おい、何やってんだよ、」

俺は状況が読み込めなかった。そんな中でも標準が俺に向いているのはわかった。

???

「あばよ」

バン

ヴェル

「がはあ」ぼちゃん

—— 現在 ——

ヴェル

「そして、俺はあの地獄から帰還できた。唯一の人間として、『地獄からの帰還者』という称号をもらった。そして、その後日本に渡り、大本営のお偉いさんから任務を受け、この提督をやっている。」

明石

「じゃあ、その眼帯は、、」

ヴェル

「あの時の傷を隠す為。そして自分自信を偽り続けるための道具さ。」

そう言った俺の顔に涙が流れる

ヴェル

「俺はもう、誰も失いたくない、もうあんな思いをするのはごめんだ!」

涼月

「提督・・・」

ヴェル

「これが、俺が今まで隠していた過去だ。」

俺はそう言つて話を閉じた。話し終えた俺の目には涙が溢れていた。

ヴェル

「ごめんね、皆こんなのが提督で、」

そう言つた瞬間僕は抱き締められた。

ヴェル

「へ？」

涼月

「そんな事を言わないでください。提督、私たちにとって提督は大事な人なんですから。」

ヴェル

「ごめん、ありがとう」

響&皐月

「何かあったら私（僕）達に相談してよ。」

吹雪&明石

「だってもう一人じゃあないんですから。」

そう言われた瞬間俺は安心して、泣いてしまった。

ヴェル

「ありがとう、ありがとう皆、うう泣」

涼月

「よしよし、よく話してくれたね。」

——司令室の廊下——

シロナ

「いい仲間を持ったね後輩。」

続く

新たな試み（前編）

あの話をしてから数週間後のある日僕は明石さんのいる工廠に来ていた。

ヴェル

「明石さんいますか〜?」

明石

「は〜い。ここにいますよ〜」

声が出た方向に向かった。

明石

「あら、提督がここに来るなんてメンテナンス以外では初めてですね。」

そう笑顔で言ってくれた。

ヴェル

「そういえば、そうですね。」

明石

「で、相談と言うのは? 提督の事ですし私とお話だけって言うのはほとんど有り得ませんし。」

ヴェル

「分からないよ、もしかしたらお話だけかもしれないよ。ふふふ、つて冗談は置いといて、本題に入るね。」

明石

「ええ、お願いしますね」

ヴェル

「えつとね、単刀直入に言うとな僕専用の艤装を作つて欲しいんだ。」

僕はそう彼女に伝えた。

明石

「・・・」

ヴェル

「ダメかな？」

明石

「大丈夫ですよ、でも、」

ヴェル

「でも？」

明石

「制作には5週間位必要なの、それまで待つてくれる？」

ヴェル

「わかりました！ありがとうございます！明石さん！」

明石

「ふふふ、頑張るね♪」

ヴェル

「頑張つてね明石さん♪」

そう言つて僕は工廠を後にした。

ヴェル

「うーんこの後どうしようかな。やる事無いしなあ。」

そんな事を呟いていたら。

???

「司令官〜！」

そう呼ばれ後ろを振り返つたら。

ヴェル

「うわあとつとつどうしたの？皐月ちゃん。」

皐月

「実はボールで遊んでたら屋根に行っちゃって、取れなくなっちゃったんだ。」

ヴェル

「なるほどね。それはどこの屋根だい？」

そう僕が聞くと臯月は鎮守府の一番高い屋根を指さした。

ヴェル

「あーなるほどねえ、わかったよ取ってあげるよ」

臯月

「ありがとう司令官！でも、あんなに高いのどうやって取るの？」

そう聞かれたので僕は

ヴェル

「ラペリングだよ。」

臯月

「らぺりんぐ？」

ヴェル

「そう、でも危険だから近くに居ないでね。」

そう言つて僕は鎮守府の壁に近づいた。

ヴェル

「よつと！」

僕は鎮守府の屋根にワイヤーフックを掛けた。

皐月

「すごい！司令官かつこいいい！」

ヴェル

「よし、取れた。」

そのまま僕は皐月にボールを渡した。

皐月

「ありがとう司令官！かつこよかったよ！」

ヴェル

「ふふふそれはどうも。じゃあね」

僕はそのまま鎮守府の中に入った。

ヴェル

「で、何しよう、やる事まあ、武器のメンテナンスするか。」

涼月

「提督？何しているのですか？」

メンテをしていたら涼月さんに声をかけられた。

ヴェル

「メンテナンスだよ、給弾不良が起きないようにね。」

涼月

「なるほど。提督はいつもやっているのですか？」

ヴェル

「まあね、これは定期的にメンテしないと撃てなくなっちゃうからね。」

涼月

「なるほど、私たちの砲台と一緒になんです。」

ヴェル

「確かにそうだね。」

メンテナンスをしながら涼月さんとおしゃべりをしていて、8時間がたった。

ヴェル

「えくつと今何時だ？」

時計は21時を少しすぎた頃だった。

ヴェル

「もうこんな時間か、明石さんの様子を見に行つてから寝るとしよう。」

そうして、明石さんの様子を見に行つたが、明石さんはいなかったので、僕は自分の

部屋に戻り就寝した。

続く

新たなる試み（後編）

5週間後僕は明石さんの工廠に来ていた

明石

「提督出来上がりしましたよ！提督専用の艦装♪」

彼女はともうきうきしていた。

ヴェル

「どんな感じになりました？」

明石

「えつとですね。先ずは靴ですが、スニーカーの様に見えるよう作りました！それから、魚雷発射管は提督の武器をしまえるようにしました！ですが、そのせいで魚雷は発射できないですからね」

ヴェル

「なるほど、でも、武器がしまえるのなら嬉しいよ。」

明石

「ありがとうございます！それで、砲台はですね。提督様に改造しました！例えば提督

が良く携帯している拳銃型にしたりしてますよ!」

ヴェル

「なるほど、それなら僕が戦場であたふたすることもないね!ちなみに種類はどれくらいあるの?」

明石

「えつとですね。アサルトライフル型と、サブマシンガン型と、ショットガン型と、LM G型と、ハンドガン型と、マグナム型と、スナイパーライフル型と、ランチャー型があります!」

ヴェル

「うわあすごく作りましたね、どれにしようか悩んでしまいますね。」

明石

「通常の艦娘は同じ種類の砲台しか持てませんが提督のは特別でメインに2つサブに2つの系4つの砲台を持つことができますよ♪」

ヴェル

「それはいいね!」

明石「それから、カスタムもできますが、サブレッサーはつけられませんから注意してください!」

ヴェル

「わかったよ明石さん、それにしてもすごいねたった5週間で、こんなに作ってしまいうんですから。」

明石

「はい！工作艦ですから！」

ヴェル

「よし、早速装着しよう！」

明石

「私も手伝いますよ」

艀装装着後

ヴェル

「あとはこのコートを着てよし！」

僕は昔の暗殺者衣装のフード付きコートを着て、鏡を見た。

明石

「とても似合ってますよ！提督♪」

ヴェル

「ふふ、ありがとう明石さん」

明石

「ですね、この艦装は慣れるのに少し時間がかかるのである試験を受けてもらいます！」

ヴェル

「試験ですか？」

明石

「簡単にいえば演習ですね。こちらが指定した艦娘に勝つてば、いいんですよ！」

ヴェル

「なるほど。わかりました。その試験受けます！で、演習相手は誰ですか？」

??? 「それは僕（私）だよ。」

振り返ると皐月と涼月さんが立っていた。

ヴェル

「これは骨が折れそうだな。」

僕はそう小声で零した。

皐月

「僕達絶対に負けないからね！」

涼月

「私も負けませんよ。」

そう言う彼女達に僕は

ヴェル

「ああ、こちらとしても負ける気は一切ない」

そう言った。

ヴェル

（対人戦は久々だな。絶対に負けない。俺はもう。）
そう決意した僕は工廠を後にした。

続く

試験演習

試験演習当日控え室にて

ヴェル

「はあー緊張してきた。一様死なないとは言っても久々過ぎてちよつと怖いんだよなあ。」

そう僕が嘆いていると

シロナ

「まあ多分行けるよ！君ならね。」

ヴェル

「あはは、そうかな？銃は一樣撃ってるちやあ撃ってるけど・・・」

シロナ

「だああーもう！めんどくさい！そんな事考えるより先ずは目の前の問題を解決してから悩みなさい！」

ヴェル

「いやアンタは俺のオカンか！」

そう突っ込んでしまった。

シロナ

「多分オカンだよ。」

ヴェル

「え？嘘ちよつとその返しは引くわ〜」

シロナ

「もう酷いよ！」

ヴェル

「あはははでも、先輩のお陰で、元気でたよ。ありがとう。」

シロナ

「それは良かったじゃあ試験演習頑張つてね。」

そう言つて彼女は控え室から出ていった。

ヴェル

「すうー良し。」

僕は深呼吸して、あの黒いフード付きコートを着た。

アナウンス

「あと少しで演習を開始します。演習を実施する方々は出撃の準備をお願いします。」

ヴェル

「そろそろか、」

僕は銃を手に取り。出撃口へ向かった。

アナウンス

「演習を開始します。両者共に頑張ってください。」

ヴェル

「よし、絶対に勝つ！ヴェル抜錨!!」

そう言うのと鎖で引つ張られ出撃口か、演習海域へ突入した。

明石

「さあ、両者どんな戦いを見せてくれるのでしょうかね。楽しみです♪」

シロナ

「多分彼なら勝てるでしょきっと。」

ヴェル

「海上はこんな感じなんだな、これじゃスナイパーはきつそうだな。」

そう言った瞬間何かが飛んできた。

ヴェル

「危ないってこれが飛んで来たということはその言うことか。」

僕はそう言うと、アサルトライフルを取り出した。

涼月

「当たりませんでしたか。」

臯月

「どんまいだよ涼月」

臯月

「でも、気付いてない見たいだよ。」

涼月

「なにももう一発放て！」

そう言つて私は提督に向かって主砲を放った。

ヴェル

「のわあ、クソ何処から」

立て続けに砲弾が飛んで来た。

ヴェル

「なるほどそこか。」

僕は砲弾が飛んで来た方向へ進んだ。

涼月

「バレてしまいましたね。」

臯月

「さすが司令官。周りの観察力が高いね。じゃあ僕達も応戦しようか！」
私たちがそう言って散開して提督にの方向へ進んで行った。

ヴェル

「見つけたよ涼月さん。」

涼月

「見つかったちゃいましたか。まあいいです。提督勝負です！」

私は主砲を放った。

ヴェル

「危ねえ、クソ喰らえ！」ダダダダ

僕は持っていたアサルトライフルで、応戦した。

涼月

「なかなか、やりますね。提督ですが後ろにも注意ですよ。」

ヴェル

「な、しまった・・・がはあ」

ドカーンと僕の足元で、爆発が起きる。

皐月

「僕達の作戦勝ちだね涼月！」

涼月

「油断しないでまだ、分からないわよ。」

そう言ってまた私は主砲を放った。ヴェルの周りで、爆発が起きる。

皐月

「これで僕達の勝ちだね！」

涼月

「ええ、多分これで私たちの勝利だと思えますよ皐月ちゃん」

そう言っていると。皐月ちゃんの魚雷発射管が爆散して行つた。

皐月

「きゃあ、何？一体何が起きたの？」

涼月

「そんな、なんで!？」

でも、原因はすぐにわかった。

ヴェル

「あんまり、俺を舐めるな！」

涼月

「な、そんな嘘でしょ、」

私が唾然としていると皐月ちゃんの機関部が大破した。

皐月

「きゃあ、悔しいけどリタイヤだね。涼月さん後は頑張つて。」

涼月

「ええ、任せて皐月ちゃん」

ヴェル

「あまり、敵から目を背けるな。」

涼月

「な、しまっ……」

私はヴェルからの攻撃をゼロ距離で、受けてしまった。

涼月

「うう、私たちの負けです。」

アナウンス

「そこまで！」

試験演習の終わりを告げるアナウンスがなった。

その瞬間僕は両膝から崩れ落ちた。

ヴェル

「がはあつ、やっぱり…魚雷の後の砲撃受けた体で、戦うのは…きつ…いな。」
そう言って僕は気を失った。

試験演習結果

ヴェル

「うーっ、ここは？」

僕が目を覚ますとベットのの上にいた。

明石

「目が覚めましたか、提督」

そう彼女が言った。

ヴェル

「あれさういえば僕はなんでここにいるんですか。」

起き上がろうとしたその時。

ヴェル

「痛ア！」

僕の下半身に猛烈な激痛が走った。

明石

「提督あまり動かない方がいいですよ、足を骨折しているので。しばらくは車椅子です

ね。」

そう彼女に告げられた。

ヴェル

「そうか、あの時に魚雷を直で、喰らったんだっけ。」

明石

「そうですよ。その上さらに砲撃も喰らっているんで足が骨折だけで済んだのは奇跡ですよ。もう、全く提督は無茶し過ぎですよ。」

そう言われた。

ヴェル

「え？その後僕が負けたんじゃないの？」

そう明石さんに聞いたら。

明石

「え!?まさか提督あの後覚えてないの!？」

そう驚かれた。

ヴェル

「うん、全くといって覚えてない。」

そう言っていると。

ガラガラと、医務室の扉が空いた。

加賀

「提督体の方は大丈夫かしら？」

加賀さんだった。

ヴェル

「ええ、まあ何とか大丈夫ですよ。」

そう答えると。

加賀

「良かったです…提督が無事で…本当に…」

彼女の目に涙が浮かんだ。

ヴェル

「加賀さん、ごめんなさい心配をかけて。」

加賀

「大丈夫よ、」

そう言って彼女に撫でられた。

加賀

「それでは、私はこの辺で提督お大事に。」

彼女はそう言つて医務室を出ていった。

ヴェル

「そういえばなんですけど、試験はどうだったんですか？明石さん」

そう質問すると、彼女は笑顔で。

明石

「合格ですよ。提督おめでとうございますよ」

そう言つてくれた。

ヴェル

「良かった」

と安堵したのもつかの間

明石

「ただし、艀装は何とかなりますがアサルトライフルはもう使えませんね。」

そう告げられた。

ヴェル

「やっぱりあの魚雷を喰らつたから？」

そんな事を言っていると。医務室の扉が行き良いよく空いた。

ガラガラガラ、バァン！

ヴェル&明石

「何事?!」

シロナ

「大丈夫!アサルトライフルが壊れたと聞こえたが後輩君!君にはこれがある!」

そう言つてシロナ先輩はアタツシユケースからアサルトライフルらしきものを取り出した。

ヴェル

「それつて!僕の愛用してた「HK416DS9」!もう無くなったと思つてたよ。」

シロナ

「ふふふ、後輩の武器を管理するのも先輩の務めですから!」

ヴェル

「ごめんそれはちよつと引く」

明石

「あはは、でも、提督先ずはその骨折を治さないとですけどね。」

ヴェル

「そうだね。早く治さないと。指揮官がこんなんじや皆の士気も下がるだろうし。」

その後もお見舞いたくさんの艦娘達が来てくれた。

閲覧可能な資料 1

1：ヴェル

昔暗殺者をやっつけていて、ある大きな任務でデルタチームと言うチームを率いていたが、「地獄：インフェルノ」と言う難攻不落の絶対孤島要塞の任務で仲間に裏切られ目を負傷し、その後崖から海に落ちた事で記憶が1部掛けている。今は有上鎮守府で、提督兼戦闘員をしている。普段は僕と言う一人称だが、感情が昂ると俺に変化する。彼は銀髪で、左目に眼帯をしている。そして彼は、車の整備や、銃の改造にはとんでもない集中力がある。気づいたら10時間立っていた事もあったらしい。作中で、出てくる「HK416DS9」はヴェルがカスタマイズした。HK416Dなのである。サプレッサーを装着していて、完璧なる消音を実現している。彼が所属している、鎮守府は彼が制圧した鎮守府である。

ちなみに、彼は艦娘が大好きです。

2：シロナ

ヴェルの先輩に当たる人物で、スナイパーである。ちなみにヴェルもスナイパーは使えるがシロナの方がスキルは上である。彼女はデルタチームでは無かったが、ヴェルと

仲が良く。別の作戦では、ヴェルのバックアップ（後方支援）をしていた。ヴェルの事を後輩君と呼ぶ癖がある。本人はやめてもらいたいが彼女にやめる気は全くないらしい。そして、またヴェルと一緒に任務をしたいと願っている人でもある。

3：響

ヴェルが鎮守府に着任する時大本営のミスで彼女が連れてこられた。ヴェルを見ても怖がらずに普通に接する事ができた艦娘である。とてもクールで、冷静だが、提督に密かに好意を抱いている艦娘でもある。

4：皐月

本来はあのブラック鎮守府に行く予定だったが、ちょうどヴェルの鎮守府制圧任務と重なり大本営に引き止められていた艦娘である。ヴェルを見た時に少し怖がっていたが、ヴェルが優しく話しかけてくれたことで彼への恐怖心がなくなり、今では普通に話すことができるようになった。彼女も提督に好意を抱いている。

5：加賀

ヴェルが制圧する前からブラック鎮守府に居た。正規空母。彼女は昔の提督に好かれていて、虐げられる事は無かったが周りの皆が虐げられているのを耐えられず。大本営に救援を要請したのが彼女である。ヴェルを見た時に優しい笑顔で「良かった優しい人な人で、」と喋っていることから前の提督は相当酷いものだったらしい。

6：明石

彼女も加賀と一緒に、ブラック鎮守府の工廠で、働いていた。そのは無理難題を言われ絶望している時にヴェルの制圧任務で、ヴェルに救われたため彼女も彼に好意を抱いているひとりである。

7：涼月

彼女も、明石さん達と一緒に、ブラック鎮守府に居て、前の司令官から酷い仕打ちをされていた。補給なし。睡眠なし。といった酷い仕打ちをされていたが、ヴェルが救ってくれたおかげで、明るい性格を取り戻しつつある。彼女も提督に好意を持っている。

この先はロックされていて見れない

鎮守府の名前

ヴェル

「そういえばさ。」

響

「どうしたの？司令官？」

ヴェル

「この鎮守府に名前があるの？」

そう車椅子を押してくれている彼女に問いかけると。

響

「あるらしいけど、司令官が変わったから変えてもいいんじゃない？」

そんな答えが返ってきた。

ヴェル

「そうか、よし、皆で決めようか！」

響

「そうだね。司令官」

彼女は乗り気だった。

ヴェル

「よし、じゃあ司令室へレッツゴー」

そう言つて手を挙げた瞬間

ヴェル

「痛アー！」

右肩に激痛が走つた。まあ無理もない。あの時の怪我からまだ一日しか経つてないのだから。

響

「司令官、まだあまり激しい動きは控えた方がいいね。」

そう彼女に叱られてしまった。

ヴェル

「そうだね。痛つつ」

艀装を付けられるといつても自分自身人間と変わらないのでバケツを被つても怪我は完治しない。

ヴェル

「はあー、不便だな、この体、それに少し恥ずかしいし。」

響

「私は司令官と一緒にいられるから良いけどね。」

あまりの斜め上の回答に僕は「え？」と言う変な声が出てしまった。
響

「さあ、着いたよ司令官」

ヴェル

(聞かなかった事にしよう。)

世の中には知らない方が幸せな事があるだろう、それがこれだという謎の納得をした。
司令室にて

涼月

「提督、体の方は大丈夫ですか？」

ヴェル

「まだ結構痛む。」

そんなたわいない話をした後に皆に聞いた。

ヴェル

「この鎮守府の名前を改名しようと考えているんだ。皆異論はないかい？」

その場に居た全員「ないよ。」と答えてくれた。

ヴェル

「と、改名案を出す前にこの鎮守府の名前ってなんだったの？」
そう聞いた。

皐月

「この鎮守府名前は黒岩鎮守府って名前だったんだ。前の提督の名前が黒岩だったから。」

前の提督それはブラック提督である。

ヴェル

「黒岩ねえダサイ。」

僕は率直にそういった、多分今までで一番早い判断と思ってる。

皐月

「凄い素直だね司令官。」（苦笑）

若干引かれてしまった。だって、そうじゃん！自分の名前を鎮守府の名前を入れるってあんましねえ。

ヴェル

「それで、どうしようかな鎮守府の名前」

色々な案が出てきたが、あんまりピンと来るものがない。

ヴェル

「どうしようかな。もういっそ「注文の多い鎮守府」する？」

全員

「それは、別の人の鎮守府の名前でしょ！」

皆にツツコミを入れられてしまった。

ヴェル

「ごめんごめん、でも真面目にどうしようかな。鎮守府の名前」

「凄い悩んで4時間が経とうとしていた。正直こんなに時間が掛かるとは思わなかった。」

ヴェル

「うーんありうえ、有上」

全員

「提督？」

ヴェル

「この鎮守府の名前は有上で、良いかな？」

響

「有上鎮守府、ふふふ、嫌いじゃない。」

涼月

「いい響きですね。有上鎮守府」

皐月

「凄いい好きだよ僕は！」

皆からも好評らしい。

ヴェル

「よし！今日からこの鎮守府の名前は有上（ありうえ）鎮守府に改名する！」
こうして鎮守府の名前を無事決める事ができた。

提督の本来の姿

ヴェル

「はあーどうして、こうもブラック鎮守府は存在するんですかねえ？」

ベンチに座りながら、皮肉たつぷりに言った。

???

「そうねえ、反吐が出るわね。」

急に後ろから声が聞こえて驚いて振り返った。

ヴェル

「わあ！びつくりした。ねえシロナ先輩僕が心霊苦手なの意識してわざとやってるでしょ？」

シロナ先輩が居た、なんだろうこのデジャブ感

シロナ

「あはは、後輩君の驚いた表情見るの好きなんだもん！」

そんな事を言われた。

ヴェル

「じゃあ昔に僕の部屋にブービードッキリトラップ仕掛けたの先輩だったってこと!？」

シロナ

「そうだよ、ふふふ」

否定せずに、不気味に笑う先輩が怖いと思った。

シロナ

「で、話変わるけど昔みたいに戻る気は無いの?」

先輩が話す事はだいたいこれしかないので言ってくる。言ってくる。

ヴェル

「少し考えさせてくれ先輩」

そう先輩の質問に返した。

シロナ

「おや、君がそんな回答をするなんてどういう風の吹き回しだい?」

先輩はいつも断る僕がこんなことを言うのは予想外だったらしい。

シロナ

「まあ、じっくり悩んでおくれよ後輩君」

そう言って先輩は去っていった。

ヴェル

(昔みたいにか、)

そんな事を思いながら僕は司令室に行き、司令室にある金庫を開け中にある書類を取り出した。それは引退宣言書のようなものだった。

ヴェル

「やっぱり、まだ、戻れないかな」

そう言つて書類を戻そうとした時

臯月

「何してるの？司令官」

ヴェル

「うわあ」ガーンツ！

急に話しかけられたことで僕は頭を机にぶつけてしまった。

ヴェル

「痛てええ」

臯月

「ごめん司令官驚かせちゃったね」

そう彼女に謝られた。

ヴェル

「大丈夫だよ、おお痛てえ」

皐月

「それはなんなの？」

皐月が僕の持っている書類が気になる様だ。

ヴェル

「僕の暗殺者引退宣言書だよ。」

皐月

「へえーあ、そうだ司令官、司令官に手紙が届いているよ。」

そう皐月は持っていた封筒を渡してくれた。

ヴェル

「ありがとう皐月」なでなで

皐月

「えへへありがとう司令官／＼／＼／＼」

そして彼女は司令室を出ていった。

ヴェル

「どんな事が書いてあるんだろ。差出人は不明？」

そして、僕が封筒を開けると今にも力尽きそうな字で「たすけて」と書いてあった。

ヴェル

「うっ、」

それを見た瞬間に僕は気持ち悪くなってしまい。トイレに駆け込んだ

ヴェル

「ゲホゲホうっオエエエエ」

ブラック鎮守府の素性は知らないがこれほどまでだと流石にキツかった。

ヴェル

（ハアハア、こんなに酷い事になっていいのか。これはやばいな。）

そんな事を思いながら僕はある人物に電話をした。

???

「はい、もしもし」

ヴェル

「砂川さん今お時間よろしいでしょうか？」

砂川

「おおヴェルじゃないか、久々に声が聞けて嬉しいよ、でもどうしたんだい？君から私に電話を掛けてくるなんて珍しいじゃあないか？」

ヴェル

「実はお願いしたい事がありました、」

砂川

「どんなお願いだい？」

ヴェル

「俺の暗殺者引退宣言を撤回したい。」

砂川

「・・・」

続く

提督の本気

砂川

「何故引退宣言を撤回したいんだい？」

彼が電話越しに僕に優しく問いかけた。

ヴェル

「今日僕に手紙が届いたんだ、その内容はただ、か細い字で、たすけてとだけ書かれていた。それを見た瞬間に僕は決心したんだ、この手紙の差出人を助けたいって、そう思ったから。」

砂川

「また、辛い思いをするかもしれない、それでもいいのかい？」

そう彼は聞いてきた。

ヴェル

「確かにそうだ、でも何もやらないで辛い思いをするのがもつと嫌なんだ。だからその宣言を撤回したい。」

砂川

「例え、その決断が間違いだとしても、君は宣言を撤回するかい？」

そう聞かれた瞬間僕は

ヴェル

「俺は、俺の決断は間違いなんかじゃない！」

そう声が荒らげてしまった

砂川

「君の決意はわかった君の引退宣言を撤回しよう！」

ヴェル

「ありがとう砂川さん」

そう僕は彼にお礼を言った。

涼月

「提督どうしましたか？ 凄いい声が聞こえたのですか？」

そう提督に聞いてみた。

ヴェル

「大丈夫だよ、気にしないで」

そういう彼の目には涙が浮かんでいた。

涼月

「そうですか、でもあまり無理しないでくださいね。」

ヴェル

「ああ、わかっている。」

そう会話を終えた後僕は先輩に連絡をした。

ヴェル

「先輩、あの鎮守府の件僕にもやらせてくれないか？」

シロナ

「やっとな決心したんだね。後輩」

ヴェル

「ああ、やっとな決心が着いた、あの宣言を撤回するよ。で、いつ、決行する？アウル」

シロナ

「そのコードネームで呼んでくれるの久々だねえヴェル、決行は明後日の夜12時だよ」

ヴェル

「わかった。ありがとうアウル」

そう言って電話を切った

ヴェル

「待っているクズ提督ども、この俺が行ってやる。」

そう俺はこぼして、装備の整備をした。

そしてあのコートを着た。やっぱり俺はこのコートを着てこそ暗殺者ヴェルの復活と言えるだろう。

ヴェル

「これで完璧に引退宣言撤回になるな。」

そして、僕は、コート着たまま、外に出た。何故外に出たのかわ僕にも分からない。そうして、夜の海を眺めていると。

???

「そこに居るのは誰ですか？」

と丁寧で、優しい声が聞こえてきた。振り返ると加賀だった。

ヴェル

「加賀さん僕だよ。」

そう僕は彼女に返した。彼女は僕だとわかった加賀さんは僕に微笑んでくれた。

加賀

「提督あまり、夜風に当たっていると、お腹を壊しますよ。」

ヴェル

「わかってるよ、でも、何故か、ここに来て、夜の海を見たくなくなったんだ。」

その時海風が、吹いた。まるで僕を応援しているように。

続く

ブラック鎮守府侵入任務&艦娘救出作戦

僕が引退宣言を撤回した2日後そう、潜入任務当日

ヴェル

「今日が、潜入任務か、よし、気を引き締めて行こうか。」

響

「今から仕事かい？もう零時を回るけど？」

そう彼女に聞かれた。

ヴェル

「ああ、とても厳しい仕事になるがね。」

あえて潜入任務とは言わなかった。

響

「がんばってね司令官」

ヴェル

「ありがとう響がんばってくるよ。」

そう彼女の頭をぼんぼんして、司令室を後にした。そして、僕は先輩の言った集合場

所に向かった。

数十分後

シロナ

「遅いよ後輩君全く先輩を待たせるなんて、酷いよ」

着いてそうそう後輩君呼ばわりされた、任務だからヴェルと呼んでくれるかと思つたが違つたらしい。

ヴェル

「任務でも、後輩君って呼ぶのは変わってないねえアウル」

そう、皮肉を漏らした。

シロナ

「そういう君こそ、任務になったらコードネーム呼びするのは変わらないよね。普通に先輩でいいのに」

そんな返しをされた。

ヴェル

「まあそんなことより、任務だ、敵勢力はどんくらいだ？」

そう彼女に聞くと、ライフルのスコープを渡された。

ヴェル

「自分の目で確かめろということか。」

そうして、渡されたスコープを覗いた。

ヴェル

「えっと、敵勢力は70位か、装備は、AUGに、AK47、それからベネリのM4に、FAMASか、うん、バラバラ過ぎない？」

あまりの統一感の無さに突っ込んでしまった。

シロナ

「で、キレのいいツツコミが炸裂したところで、どうするの？」

ヴェル

「先ずは照明を全部消したいな、見つかると面倒だし。」

シロナ

「あら、でも殺す手間は多少なりとも少なくなるわよ？」

そういう彼女に驚いた。

ヴェル

「な!? ってそう言うことか、暗視スコープより、普通の方が狙いやすいからでしょ」

シロナ

「当たり前だよ〜ふふふ」

昔と変わらず能天気な、先輩だったまあそれが先輩らしいといえれば先輩らしい
ヴェル

「まあ、お喋りはこの辺にして、そろそろ始めますか。」

シロナ

「そうね、援護するわ、後輩」

そう告げて、僕は集合場所を後にして、鎮守府の塀に向かった。

ヴェル

「こちらヴェル、侵入位置に着いた。」

シロナ

「了解、この任務をもう一度確認する。あの憲兵達は殺してもいい、そして、艦娘達を救出する。OK?」

ヴェル

「OK」

そうして、僕はラペリングをし、鎮守府に侵入した。

憲兵

「いやあ、艦娘を虐げるのはいいなあ。」

憲兵

「そうだね。あの悲鳴たまらないよねえ」

そんな会話が聞こえてきた。

ヴェル

「胸糞悪い」

そうこぼして、憲兵達の頭に標準を合わせた。そして、僕は銃の引き金を引いた。

ヴェル

「くたばれ。」パシユパシユ

そう僕の拳銃小さな音を立てクソ憲兵どもを葬った。辺りには鮮血が広がっている。

憲兵

「全くつまんねえな、早くこんなことやめて、あいつらを汚したいぜえ」

ヴェル

「また一人、クズが居たな、死ね」

そう言つて大型のナイフを憲兵の喉仏に突き刺した。

憲兵

「ふがあがが、が、が」

ヴェル

「くたばつてろクソが。」

そう吐き捨てて、鎮守府の建物に入った。

ヴェル

「この鎮守府は地下もあるのか。先ずは地下に向かうか、」

そうして、僕は地下に向かったが、そんな事をしなければよかったと後悔した。

ヴェル

「うっ、これは拷問器具!?なぜこんなものが。」

そこには血塗られた拷問器具があった。そして、その奥には牢屋があった。

ヴェル

「なんなんだよこれ、酷すぎる。」

そこには、提督に歯向ったのだろう、ズタボロにされた憲兵の死体があった。

ヴェル

「クソ!」

そうして、僕は地下を後にした。一刻も早くクズを始末しないとと言う思いに駆られたからだ。

ヴェル

「絶対に殺す!俺がこの手で!」

そうして、僕は、建物内に居る、憲兵を排除しながら進んだ。

ヴェル

「おかしい、今まで1度も艦娘とすれ違っていない。」

僕はこの鎮守府のおかしい事に気付いた。艦娘がまだ一人も会えてないのだ。

ヴェル

「アウル、この鎮守府何かがおかしい。艦娘に会ってないんだ。」

アウル（シロナ）

「それなら大丈夫、艦娘たちはみんな、別の建物にいるから。」

ヴェル

「そうか、よかった。」

アウル（シロナ）

「でも、1人だけ足りないのよ艦娘が、その子の搜索をお願いするね。」

ヴェル

「了解。ヴェルOUT」

そう通信を終えて、僕は執務室に着いた。

ヴェル

「ここか、一気に行くか。」

そう言つて、僕はドアを蹴破った。

ヴェル

「動くな！」

クズ提督

「おつとそつちこそ銃を下ろせ。さもないとこいつの脳みそをここにぶちまける事になるぞ。」

菊月

「たす、けて」

そういう奴の手にはリボルバーが握られていた。いくら艦娘と言ってもあれを至近距離で、撃たれたら死んでしまうだろう。

ヴェル

「わかった、なら、その子も離せ。」

そう言つて僕はアサルトライフルを置いた。

クズ提督

「ふつ、バカめ死ねえ！」

そう言つて奴はリボルバーの銃口をこちらに向けた瞬間僕はナイフを投げた。そして、リボルバーを弾いた。

クズ提督

「な、クソ！」

ヴェル

「菊月目を睨れ！」

菊月

「え？うん」

バンバンバンバン

そうして、菊月が目を睨った事を確認して、クズ提督に向かって、銃を体に2発、頭に2発人を完璧に葬る撃ち方コロラド撃ちをした。その瞬間クズの脳が辺りに散らばった。

ヴェル

「菊月さん？よかったまだ、息はある。」

彼女は極度の緊張で、気絶してしまったようだ。まあこちらとしても都合はいいが。

ヴェル

「最重要人物の排除を確認帰還する。」

アウル（シロナ）

「了解他の子達は全員装甲車に乗せたよ。」

ヴェル

「そうか、わかった。今すぐそっちに行く。」

そして、建物を出た瞬間。自分の足に激痛が走った。

ヴェル

「うがア」

あまりの痛みにもその場でうずくまってしまった。

憲兵達

「クソがてこずらせやがって！」

そう銃口を向けられダメだと思った時に桜の香りがした。

???

「封刀に閉じ込められし、魔の力よ……封印の定めに従い、我の前に示すがいい」

「来たれ！ 剣の道を極めるべく、修羅に堕ちた外道の剣客！ 《ようじんぼう!!》」

そう聞こえた後、歌舞伎のような見た目の何かが現れ憲兵達を一掃して行つた。あたりはそして、「ようじんぼう」と言われるその何かは俺の前で止まり。

ようじんぼう

「我が名はようじんぼう。救援の依頼を受け、ここに立つもの。ソナタらを助けに来た。」

そう言った後、安堵からか私は気を失ってしまった。

そして、僕は有上鎮守府の医務室に居た。あとの話だと。全員生還し、死亡者は誰もいなかったと言う。

ヴェル

「よかった。みんな無事なんだね。」

シロナ

「ええ、それでその子達はしばらくこの鎮守府に置かせてもらうらしいわよ。」

ヴェル

「また鎮守府が、賑やかになりそうだよ。」

こうして、僕の引退宣言撤回の初任務は幕を閉じた。

提督と不思議な夢

ヴェル

「ここは？どこだ？僕は確か、あの鎮守府制圧任務の後、自分の部屋に居て、眠りに落ちたはずなんだが。あれ？そういうえば足が痛くない。と言う事は夢か」

そして、僕は辺りを見渡した、辺りには満月の光がさす海が広がっている、そして、綺麗な青い蝶がヒラヒラと飛んでいる。まるで僕を誘っているかのように

ヴェル

「美しい蝶だ。」

そう言いながら、僕は誘われるかのようにその蝶について行った。ついて行った先にあったのは。大きい桜の木と、1本の青薔薇が咲いていた。

ヴェル

「母さんが好きな桜と、父さんが好きな青薔薇。何故こんな所に？」

???

「お待ちしておりました。提督さん」

綺麗で澄んだ声が聞こえてきて、声が聞こえた方へ向くとそこには白い狐の面をつけ

た、女性が立っていた。

ヴェル

「提督と呼んでいるところ、君も艦娘かい？」

そう彼女に聞くと、彼女は

???

「ふふふ、さすが察しがいいですね。ですが、惜しいですね。」

ヴェル

「それは一体どういう事だ？」

疑問におもった僕は、彼女に聞いた。

???

「私は艦娘ではありません、ですが、貴方に会いたい人は艦娘ですよ。」

そう彼女は答えた。だが、沢山聞きたい事があった。

ヴェル

「ここは、どこなんだい？そして君は誰だい？」

そう僕が聞くと、彼女は丁寧で穏やかな口調で、答えてくれた

???

「ここは夢幻の海で、私は貴方様に会いたがっている艦娘ちゃんのご案内です。名前は

「ごめません。」

ヴェル

「なるほどありがとうございます」

???

「どういたしまして。」

そして、彼女は桜の木の近くで咲いている青薔薇を摘み僕に渡してきた。

???

「それを持ってあちらを登ってください。」

そうして、彼女の言った方向に目を向けると階段があった。そして、僕はそこには近づいて、僕は登っていった。登った先には鳥居があった。そして、奥の広場に道が続いている。

ヴェル

「なんだろう、この懐かしい感じ。」

そう言いながら広場に着くと、そこにはさつき見た桜より更に大きい桜の木があり、その木の麓には女性が立っていた。その女性は番傘の様なものを持ち、巫女服の様なものに身を包んでいた。

ヴェル

「美しい人だ。」

???

「やっと来てくれましたか、ヴェル君」

「そう名前を呼ばれ僕は焦った」

ヴェル

「ど、どうして僕の名前を？」

???

「まあ、そんな事よりお話しましょう♪」

ヴェル

（なんだろうこの安心する感じ）

「そう思いながら私は彼女に問いかけた。」

ヴェル

「あの、あなたは誰で、何故僕に会いたがっていたの？」

???

「あ、そうだね。まずは自己紹介からね。私は咲楽楓よろしくね。そして、貴方を読んだ理由は私をここから出して欲しいの。」

ヴェル

「なるほど、でも、何故僕なんですか？」

楓

「それは、貴方があの人の血を引いているからよ。」

ヴェル

「あの人？」

楓

「アルアっていったらわかるかな？」

その名前を聞いた瞬間僕は納得した。

ヴェル

「なるほど確かに僕はアルアの息子だからね。」

楓

「そう、だからお願い。」

ヴェル

「いいけど、どうやってあなたをここから出せばいいんだい？」

そう疑問に思い彼女に聞くと、

楓

「それは、大丈夫♪貴方が持っている青薔薇と貴方が持っているナイフを合わせるんだ

よよ」

ヴェル

「はい？つまりどう言うこと？」

楓

「えつとね、まずその青薔薇に私の思いを込めて、そして、その青薔薇と貴方が持つているナイフを合成させるの。」

ヴェル

「なるほど、理解したよ。」

簡単に言うとな彼女の意志をナイフに込めるってことらしい。

楓

「じゃあ、私に青薔薇と貴方のナイフを渡してください。」

そう言われ僕は彼女にナイフと青薔薇を渡した。そして、数秒たった後、彼女からナイフを受け取った。ナイフは青薔薇と合成させたからか、少し青かった。

楓

「それだけだと完璧にここから出るのとは不可能だから、もう一つお願いがあるの。」

ヴェル

「そのお願いって言うのは？」

楓

「それは私の、真名、を覚えて欲しいの。」

そう言われた。

ヴェル

「あなたの真名とは？」

そう聞くと彼女は

楓

「私の真名それは・・・【戦艦大和】」

ヴェル

「え？」

そう言った直後僕は目を覚ました。そして、ナイフを見るとナイフが少し青かった。

続く

先輩との出会い

響

「そう言えばなんだけどさ。」

ヴェル

「うん？どうしたんだい？響」

書類を整理していたら、響が話しかけてきた。

響

「司令官と、シロナさんの出会いってなんなの？」

なるほど、それを聞いたかったのか。

ヴェル

「えつとねえ、確か、」

そう言おうとした時、勢い良く扉が開いた

バン！

シロナ

「それに関しては私から話そう！」

響&ヴェル

「びっくりした、、」

シロナ

「で、私と後輩君との出会いは、、」

ヴェル

「そのまま続けるのかよ」

勢い良く現れたシロナ先輩はそのまま話を続けている。彼女らしいと言えば彼女らしい

シロナ

「私と後輩君の出会いそれはね、、」

数年前

大司令

「全員集合！整列！」

全員

「はー！」

大司令

「今回はチームを決める！」

まるで、遠足みたいだと思った人、安心して、僕も思ったから笑

大司令

「ウルフチームはお前達だ！」

同僚1

「イエッサー」

同僚2

「わかりました！」

同僚3

「このチームか。」

同僚4

「頑張ります。」

その後も、着々とチームが決まって行った。

大司令

「最後、デルタはヴェル！そして、シロナお前達だ！」

ヴェル

「シロナ？」

シロナ

「何？後輩私と一緒に不満？」

ヴェル

「いや、違います。」

シロナ

「そう、ならいいわ。」

ヴェル

「怖、あの先輩」

大司令

「以上！これからはこのチームで、作戦を遂行してもらおう！」

そう、大司令は言い残すと、行つてしまった。

同僚1

「また、お前はデルタか、いいなあ俺も早く入りたいたいぜ。」

ヴェル

「あはは苦笑」

数週間後

ヴェル

「あと少しで、任務か、武器の整備しなくちゃな。」カチャカチャ

シロナ

「後輩、少しいいか？」

ヴェル

「なんですか？」カチャカチャ

シロナ

「すごいね、口動かしながら作業することが出来るなんて、つて、違う、私の武器の整備をお願ひしたいのだけどいいかな？」

なるほど、そういう事が、てか、習ってなかったのかな？

ヴェル

「いいですよ、僕のベットに置いてください。」カチャカチャ

シロナ

「分かった。」ポス

そう彼女は、武器を置いて出ていった。

ヴェル

「よし、こんな感じかな？あとは、あれか、」

僕は、ベットに置いてある武器を見た後、ため息をついた。

ヴェル

「はあ、これは徹夜コースだな」

ベツトに置かれていたのはBullet M82対物ライフルと、GLOCK18だった。

ヴェル

「まあいいか、」カチャカチャ

そして、任務の当日

ヴェル

「制圧完了、シロナ先輩そっちはどうですか？」

シロナ

「終わったわよ。帰投しましょ」

こうして、僕達は任務を通じて仲良くなった。

現実

シロナ

「まあ、こんな感じかな？私と後輩の出会いは。」

ヴェル

「まあそんな感じだね。」

響

「なるほど。」

涼月

「すごい出会いですね。」

皐月

「すごかったね！」

彼女達は満足したらしい。

ヴェル

「さて、話が終わった事だし、書類を整理しますか」

続く

提督の強運（笑）

ヴェル

「そういえば、確かだけど建造つて言うものができるみたいだね。」

涼月

「提督、まだ一回も建造してないですよね。」

そう、僕はまだ一回も建造をしていない。

ヴェル

「で、どうやって建造するんだい？」

涼月

「え？提督？」

ヴェル

「はい、僕やり方わからないです」汗

そんなやり取りをしていると

明石

「なら、私が教えます！」

そうやって、ドアが勢い良く開かれた。

ヴェル

「明石さん！」

明石

「提督私に着いてきてください！私が教えます！」

そうやって彼女は、僕の手を強引に引っ張って工廠に連れていかれた。

明石

「まずは、この資源の量を決めてください。」

ヴェル

「えっと、これをこうしてこうかな？」

そう、明石さんの指示に従って資源の量を決めた。

明石

「そうして、量を決めたら、建造ボタンを押してください！」

そう言われ僕は建造ボタンを押した。

工廠から「カンツカンツ」と音がする。

数時間後

明石

「提督新たな艦娘が建造できましたよ。」

ヴェル

「分かった直ぐに行くよ。」

そうして、僕は工廠に駆けつけた。そして、建造していた場所に着くと「建造完了」と書かれた赤いランプが点灯していた。

明石

「さあ提督開けましょう。」

ヴェル

「うん」

建造の扉を開けた。

那珂

「川内型軽巡洋艦三番艦那珂ちゃんだよお〜♪提督よろしくね〜♪」

数ヶ月後

ヴェル

「もう建造したくない」泣

涼月

「提督何があったんですか？」汗

あまりの事に戸惑っている涼月さんに事情を説明をした。それは1ヶ月前

ヴェル

「今日は十連建造してみよう！」

結果

那珂ちゃん10体

ヴェル

「だからよ、止まるんじや、、ねえぞ、、」

現在に戻る

ヴェル

「つていう事がありました。なので萎えています。」

涼月

「いつにもなく落ち込んでますね。」汗

いやね、そりゃあ萎えるよ同じ艦娘が10体は精神的にくる

涼月

「もう、やめた方がいいかも、しれませんね。提督」汗

ヴェル

「そうだね、じゃあ次の鎮守府制圧任務に向けて、装備を整備しよう。」

涼月

「そうですね、そうした方が良さそうですね、では、私はこれで、ちよつと夕飯の準備を
して来ます。」

ヴェル

「はい、わかりました、それでは、ありがとうございます涼月さん。」

涼月

「提督もお疲れ様でした、あまり無理せずにあとは、夕飯までには戻ってきてください
ね。」

ヴェル

「わかりました」微笑む

そうして、彼女は工廠を後にした。

ヴェル

「可愛いな、涼月さん、って違う違う整備しなくちゃ」

そして、僕は作業に取り掛かった。

カチャカチャと、響く作業の音

ヴェル

「懐かしいな」

そうして、整備をして、何時間か経った。

ヴェル

「今は・・・6時!？」

懐中時計は午後6時を指していた。

ヴェル

「早く行かないと!」

そして、行ったが間に合わなかったと言うのは言うまでもない。

ガイロット作戦

ヴェル

「さてと、こんな感じかな？ 武器調整は」

僕はブラック鎮守府に潜入するために武器を調整していた。どうしてまた潜入することになったかと言うと

数週間

ヴェル

「うーん買い忘れないね。よし、行く」

と歩みを進めた僕だが、ある所で、歩みを止めた

ヴェル

「あれ？」

雨が降る薄暗い路地裏に目をやった。そこには金髪のストレートで、美しい少女がいた。

ヴェル

「あの？ 大丈夫ですか？」

僕は少女に話しかけた。

???

「ひっ!」

少女はとても怯えていたまあ、無理も無いだろう。眼帯をしていたら誰でも怯えるよね。

ヴェル

「大丈夫、怖がらないで君を傷つけはしないよ」

???

「・・・」

ヴェル

「君の名前は？」

???

「夕立」

ヴェル

「!?」

驚いたことにその少女は艦娘だった

ヴェル

「夕立さん、一旦僕の鎮守府に行きましよう」

そうして、僕は有上鎮守府に、彼女を招いたそして、彼女の鎮守府の現状を聞いた。

ヴェル

「そんな、事が」

夕立

「お願いです！私達を助けてください！」

ヴェル

「わかった」

現在

ヴェル

「よし、あとは、ショットガンを手入れして、終わりか」

ガチャガチャ

ヴェル

「よし」

僕がショットガンの手入れをしたと同時に先輩が来た

シロナ

「やあ後輩準備はOK？」

ヴェル

「OKだよ」

シロナ

「じゃあ行こうか」

そうして、僕は先輩の装甲車のガイロットに乗り込んだ。

ブラック鎮守府

榛名

「もうやめてください提督！」

ブラック提督

「うるせえ、俺に指図するんじゃないねえ！」

榛名

「きやあ」

ブラック提督

「お前もアイツみたいになりてえのか！」

榛名

「すいませんでした。提督」

ブラック提督

「わかればいい、さあ行け」

榛名

「はい、」

そうして、私は執務室を後にした。

榛名

「夕立ちちゃん一体どこに居るの？もう嫌、誰かこの状況下から助け出して、」
「気づけば私は泣いていた。」

榛名

「はあ、もういや、誰か」

そう嘆いても変わらないってわかっていたその筈なのに何故かそう言ってしまう。

ブラック鎮守府の近くの崖

シロナ

「結構大きいわね、武装は、L85A2に、M870に、FN SCARか。」

ヴェル

「FN SCARねえ、めんどくさいな」

シロナ

「いや、あなたの装備が1番相手にしたくない個人的に」

ヴェルの装備

C7E

MP7

USP tactical

アイノックスMk4

シロナ

「侵入ガチガチ過ぎよ」

ヴェル

「確実にやりたいからね。まあ、行くか」

シロナ

「援護するよ後輩」

ヴェル

「よし、ドローンを出す」

そう言ってドローンを放ったそして、偵察をした後

ヴェル

「よし、行くか」そうして、ラペリングで、侵入した

憲兵

「なんだ貴様！」

ヴェル

「邪魔だよ」パスツパスツ

憲兵

「ごふっ」

ヴェル

「さて、次だ」

そうして、僕は鎮守府の中に入った

憲兵

「貴様、そこで何をしている!!」

ヴェル

「ちっ、バレたかフラッシュユバン！」

バーン

憲兵

「な、クソ！」

ヴェル

「眠れ」パスツパスツ

憲兵

「ぐはあ」

ヴェル

「さてと、使いますか、アイノックス起動」
起動音と共に視界が青くなる。

ヴェル

「暗闇に何か、写っているな」

びびびっ

ヴェル

「待ってろよすぐに行つてやる」

そして、執務室に着いた

ヴェル

「よし、行くか！」

ヴェル

「動くな！」

ブラック提督

「なんだ貴様！」

ヴェル

「艦娘達は何処だ！」

ブラック提督

「ふふふ、もう遅いアイツらはもう、死ぬ！」

ヴェル

「・・・」無言で銃口を向け、頭に1発放った

ガサゴソ

ヴェル

「なるほどここか」

そして、ある個室に入った、そこには艦娘がいた。灰色の髪色で、ストレートの髪の毛の艦娘が拘束されていた。その時、

ふしゅー

ヴェル

「な、毒ガス!?!」

榛名

「げほげほ」

ヴェル

「まずいな、一旦これを」

彼女にガスマスクをつける。

ヴェル

「一か八か、これに賭ける」

サプレッサーを外して、個室の扉に向けて発砲した。その瞬間、爆発して、個室の扉が吹っ飛んだ。

ヴェル

「大丈夫ですか？ 脱出しますよ。」

榛名

「は、はい」

そうして、部屋を出たが、

ヴェル

「まずい！」

そう言つて武器庫と、書いてある部屋に入った。

ヴェル

「さてと、どうしたもんかな、ん？」

僕がある物に目をやった。それは

「ミニガン」

ヴェル

「あの、すいません、ちよつとこちらを持つてくれませんか？」

榛名

「は、はい！」

憲兵

「あいつここに逃げたんだろ？」「ああ、そうだよ、行くぞ！」

ヴェル

「はぁーい♪」

ゆつくりと、ミニガンの砲身が回る

きいいいいいいん

憲兵

「逃げろー！ー！」

と、声が出た瞬間ミニガンが放たれる

ヴェル

「よし、先輩、そつちもOK？」

シロナ

「OK 艦娘はみんないるよ」

ヴェル

「OK じゃあへりで、僕は脱出するよ」

パイロット

「ヴェル、いいぞ行ける」

そうして、僕達はブラック鎮守府を離脱した。

夕立

「榛名さん！」

榛名

「夕立ちちゃん！良かった、無事で、良かった」ぽたぽた

夕立

「ありがとうございます！報酬は」

ヴェル

「いや、報酬はいらない、ただ僕の鎮守府に着任しないか？」

榛名

「いいんですか？」

彼女は素っ頓狂な、声で、聞いてきた

ヴェル

「ああ、いいぞ」

榛名

「ありがとうございます！」

こうして、また、新しい仲間が増えた

提督の強運（マジ）

響

「司令官、また建造するのかい？」

ヴェル

「まあ、うん、」

響

「司令官どうしたんだい？」

ヴェル

「そのさ、また神引きしないか心配」

そんなことも言いたくなる

響

「あ、あはは」汗

ヴェル

「はあーやっぱりやめようかな建造するの」

そう深いため息と共にそんな事を零した

響

「そんな司令官にいい事を教えて上げるよ」

ヴェル

「え？何何？」キラキラ

響

「それはね、大型建造さ」

響はウインクして言った

ヴェル

「大型建造？なにそれ？」

響

「あ、そうだったね、司令官は元々は海とは関わりが少ない仕事をしていたんだっけ、えっと、大型建造は、、」

響説明中、、

響

「という事さ、わかったかい？」

ヴェル

「ありがとう響わかったよでも今の資源で回せるのかな？」

書類に目を通す

響

「これは1回にかけるしかないね」

資材はそこそこ、あるが大型建造は、結構な、資材を消費する

ヴェル

「だな、中学校ゲームガチャで、レアキャラ引きまくってキモイと言われた僕の運の実力見せてやる」

響

「あ、あはは」汗

工廠

ヴェル

「さてと、やりますか。」響のモノマネ

響

「司令官、なんでそんなに似ているんだい？」

少し引かれてしまった

ヴェル

「職業柄、こう言う事は慣れていてね。さてそんな事より回そう！」

4000、7000、7000、2000

ヴェル

「相変わらずすごい量だな」汗

響

「そうだね」汗

そんな話をして僕達は工廠の外に出た

響

「そういえば、司令官、実は」

ヴェル

「うん？どうしたんだい響？」

響

「実はね、こんな都市伝説があつてごく稀に本当に稀に前世の1部記憶が残っている艦娘が生まれるらしいんだ」

ヴェル

「へえーそんな都市伝説があつたんだね」

響

「でも、まあ都市伝説だからね、あくまでも」

ヴェル

「はは、そうだね」

だが、この時僕達はまだ知らなかった、この都市伝説が本当になるという事が、

————— 数時間後 —————

ヴェル

「終わったかな？」

建造完了の赤いランプが点灯している

ヴェル

「あとは、これを、押すだけ、」ポチツ

???

「やあ久しぶりかな？ヴェル君」

何処か聞き覚えのある声だった

ヴェル

「あの、なぜ僕の名前を？」

疑問に思いその影に聞いてみた

???

「あはは、まだ見えてないのね。なら今のうちに名前を言った方がいいわね」

そして彼女は自身の名前を告げた

???

「大和型一番艦戦艦大和押して参ります!!」

ヴェル

「やっど、、来て、、くれた、、」膝から崩れ落ちる

明石

「提督大丈夫ですか!？」

ヴェル

「大丈夫、、ただ嬉しくて、、」

大和

「ふふっこの鎮守府では退屈しないで済みそうね♪」

続く

提督と大和

有上鎮守府に大和さんが着任してから2週間後

ヴェル

「ううーううーん事務仕事は嫌いでは無いけど少し苦手だな、、、」
背伸びしながら書類を片付けていた午前中

響

「司令官少し良いかい？」

響が尋ねてきた

ヴェル

「うん？どうしたんだい、、、」

響

「次の演習あるでしょ？」

ヴェル

「ああ、あるね」

響

「その演習相手、大和さんなんだ」

ヴェル

「え？ウソーン」汗

響

「本当だよ。」

そんな事を聞いた

ヴェル

「え？勝てるかな？」

響

「頑張つて司令官♪」

響にそう言われてしまった。こう言われては頑張らない訳にはいかない

ヴェル

「ありがとう響♪よし！頑張ろう！」

自分に鼓舞して、自室を後にした

ヴェル

「えっと、今回はスナイパーライフルと、サブマシンガンと、USPで、いいか。」

演習海上近くの待機場所で武器の整備をしていた。

ヴェル

「今まで駆逐艦としか戦ってこなかったからな未知数なんだよなあ戦艦は、しかも大和さんはその中でもトップクラス、はあく不安になってきた、、」
そうしている内に時間になった。

ヴェル

「時間か、よし！行くぞ！」

ヴェル

「出撃します！」

鎮守府ビデオ室

明石

「うーん、、」

涼月

「明石さんどうしました？」

少し悩んだような顔をする明石さんに私は聞いた

明石

「あ、涼月さん、この演習、無謀以外なものでもないのよ。」

そうこの演習は無謀ではない

涼月

「ええ、わかってます、けどもしかしたら提督もなにか策があるのかもしれないです。」

明石

「・・・」

演習海上

ヴェル

「全く敵が見えないなあ、」

全く敵が見えない。確かにこんな島があるんだつたら見えないのも無理はない。

ヴェル

「!」

その時砲弾が飛んできた

ヴェル

「何処から!?!」

駆逐艦よりも高射程なのは知っていたのだが、こんなにも射程があるのは初めてだ

ヴェル

「もう一度、もう一度砲弾が飛んできたらいたいの位置は把握出来る、!」

大和

「うーん当たりませんでしたか、」

ヴェル

「……」(このライフルは最低でも中距離まで持ち込まないと当たらない、でも、無闇に突っ込んだら砲台の餌食になる、、、、どうすれば、、、、)

その時俺は閃いた

大和

「!」

島の影から黒いものが飛び出してきた。

大和

「そこです!」

私はその黒い何かに46cm三連装砲を放った

大和

「な!」

だが、それは提督では無かった。

大和

「やっぱり一筋縄では行きませんね!」

その時大和がこつちを振り向いてきた

ヴェル

「な！クソ！」（スナイパーを速射したが、腰撃ちだったため少しズレてしまった。）

大和

「私の勝ちです！」

そして、彼女の放った46cm三連装砲を放った

ヴェル

「うぐっ」

余りの威力に島の崖まで吹っ飛ばされ、背中を強打した

ヴェル

「・・・まだ！」スナイパーを構え撃つ

当たったかは分からないそこで俺の意識は切れてしまった

続く

提督と大和のその後

ヴェル

「あれ？、、、ここは？」

気が付いた僕はただ白い天井を見ていた

明石

「提督！気が付きましたか！」

明石さんの声が出た方向を見ようとした

ヴェル

「うっ、、、」

体に激痛が走る

明石

「提督動かないでください。」

ヴェル

「明石、、、さん？」

明石

「先ず提督の状態ですが、腕の骨と、肋が折れています。」
ヴェル

「そんな、、事に、、」

心做しか声が出にくい

明石

「後は声帯に少し火傷をおってます。」

ヴェル

「ああ、、だから、、」

明石

「ですがこれがあるので大丈夫です！」

明石さんは注射を見せてきた

ヴェル

「それは、、？」

明石

「回復薬みたいなものです。少し耐えてください」

明石さんは僕の腕に注射を打った

ヴェル

「ッ、、」

僕はその注射を打たれた後眠くなって眠ってしまった

明石

「大和さん、大丈夫でしたよ提督は」

大和

「そうですか、、良かった、、」

明石

「一様は大丈夫ですが、、」

大和

「ですが？」

明石

「あの様子だと少しの間眠ったままだと思いますので大和さん」

大和

「は、はい！」

明石

「提督の近くに居てあげてください。」

そのようなことを明石さんに言われた

大和

「はい！」

私は提督の所に行った

大和

「提督、！」

想像以上に提督の体はボロボロだった

大和

「提督、ごめんなさい」

私は後悔した、あの時やり過ぎてしまったと

大和

「ごめんなさい、提督、！」

ヴェル

「謝ら、ない、で、！」

大和

「提督!!」

ヴェル

「僕は、貴方と、戦えて、良かった、そして、この傷は、僕が、望んだ物、」

だから、、、謝らないで、、、」

大和

「提督、、、」

提督は私は悪くないって言ってくれた。

大和

「提督、、、昔と変わってないですね」（微笑む）

ヴェル

「あはは、、、そういう大和さんは、変わったね、、、」

大和

「ええ、ヴェル君のおかげで変われましたよ」（微笑む）

大和さんの微笑む姿は綺麗だった

ヴェル

「大和さん、、、手を握ってください、、、」

大和

「はい」

提督の手を握る

ヴェル

「暖かい、、、」泣

大和

「提督、、、」

ヴェル

「や、、、まと、、、さん」

瞼が重い

大和

「私は提督が回復するまでここにいますだから、安心して、眠ってください」

私はそう提督に囁いた

ヴェル

「あり、、、がとう、、、すうすう」

大和

「ゆっくり休んでくださいね、提督」

私は提督の頭を撫でた

大和

「提督私は貴方を必ず守ります。」

そして私は提督の頬にキスをした

そして、提督は徐々に回復して、1週間後にはいつものように走ることができるようになった。

ある事を除いては

大和の過去

明石

「提督♪今日もですよ」

ヴェル

「はーい♪」

今日も定期検査を受ける

大和

「はぁ子供になった提督可愛い♪」

そう、「ある事」というのは提督が小さくなってしまったのです。

響

「ああ、確かにとても可愛いね。」

大和

「あ、響ちゃん♪」

響

「やぁ大和さん♪」

大和

「はあ昔に戻ったみたいで、ちよつと懐かしい」(微笑む)

響

「あ、そっか、提督のお母さんの時の記憶があるんだったね。大和さん」

大和

「ええ♪」

響

「昔の司令官を教えてください？」

大和

「ええ♪良いですよ♪」

数十年前、

アルア

「あら、ヴェルこんな所に居たのね」

ヴェル(幼)

「あ、母さん♪」

アルア

「もう、貴方は本当に大和さんが好きねえ」

ヴェル

「うん♪だっけかつこいいもん♪」

アルア

「ごめんなさいね大和さん迷惑でしょ」

大和（昔）

「いいいえ、とてもいい子ですよ♪それにとつても可愛いですし♪」

アルア

「そう、でもヴェル優しいからってわがまま言っちゃダメよ♪」

ヴェル

「はーい♪」

現在

大和

「まずこんな感じかな？」（微笑む）

響

「へえ♪そんな事があつたんだね♪」

大和

「ええ♪暇があつたらだいたい私の所に来ていましたよ♪」

響

「他にはなにかあるかい？」（キラキラ）

大和

「そうねえ？あ、あれがあります♪」

響

「何何♪」

響ちゃんがキラキラして、聞いてくる

大和

「えっとね・・・」

数十年前

憲兵

「いやあく大和さんって本当にかっこいいよな」

憲兵2

「本当だよねえあの凛々しい感じが良いよね♪」

憲兵

「ああ、本当にかっこいいよな」

大和

「私の話ですか？」

憲兵

「あ、大和さんお疲れ様です」敬礼

大和

「お疲れ様です♪」（ニコツ）

憲兵

（可愛い）

ヴェル

「憲兵さん達、、」

憲兵

「どうした坊主」

ヴェル

「もしかして大和お姉ちゃん狙ってる？」

大和

「ヴェル君!？」

憲兵

(少しいじってみるか)

「ああ、狙ってる」

ヴェル

「!」

大和

「憲兵さん!？」

ヴェル

「・・・」

憲兵

「はっはっは冗談だよ冗談」

大和

「もう憲兵さん!」

憲兵

「安心しろ坊主、狙ってねえよ」

ヴェル

「ダメ、、、」

憲兵

「へ?」

ヴェル

「大和お姉ちゃんは僕が狙ってるんだ! 誰にも渡したくない!!」

大和

「ヴェル君!?!?!?!」

ヴェル

「むうー」(膨れっ面)

憲兵

「悪かった悪かったいじったことは謝るだから、そんな顔しないでくれよ」 困惑

ヴェル

「大和お姉ちゃんは僕が狙ってるんだ」 大和に抱き着く

大和

「ヴェル君!?!?!?!」

ヴェル

「あ、」(我に返った)

大和

「嬉しかったよ♪」

ヴェル

／／／／／

現在

大和

「なんて事がありました」（微笑む）

響

「へえ、意外と大胆だねヴェル君♪」

「そうこうしてる内に定期検査が終わったらしい

明石

「あら、珍しい組み合わせですね」

大和＋響

「あ、明石さん提督（司令官）は？」

明石

「しばらくあのままでですね。」

響

「そう、」

提督が子供になったことを皮切りに物語の歯車は大きく動き出す

提督襲撃事件

執務室

ヴェル

「響お姉ちゃん♪」

響

「ん？どうしたんだい？ヴェル君♪」

ヴェル

「この漢字が分からないんだ、教えてくれる？」

響

「うん♪お姉ちゃんに任せて♪この漢字は・・・」

数時間後

ヴェル

「うーっ疲れた」（背伸び）

響

「お疲れ様ヴェル君♪」（なでなで）

ヴェル

「えへへ♪」

響

(すごく可愛い♪幸せ♪)

ヴェル

「あ、響お姉ちゃん、トイレに行ってくる」

響

「うんわかった♪」

数十分後

響

「遅いな、ヴェル君？なにかあったのかな？」

私がそう思った時

「バアンバアン」

響

「銃声!？」

そう驚いたのも束の間排気口の蓋が落ちた

響

「今度は何!?!」

ヴェル

「響、、、おねえ、、、ちゃん」

その排気口から出てきたのは、ヴェル君だった

響

「どうしたの!?!」

見た所肩、足、お腹から、血を流していた

ヴェル

「憲兵に、、、撃たれた、、、ゲホツゲホツ」

響

「憲兵?、、、!」

ヴェル

「ゲホツゲホツ」吐血

響

「ヴェル君!?!しっかりして!」

ヴェル

「響、、、お姉ちゃん、、、」

視界がどんどん狭まる

響

「死なないで!!しっかりして!!」

私は急いで明石さんの所に走った

響

「明石さん、はあはあ」

明石

「響ちゃんどうしたの!？」

私は衝撃を受けた、何故なら響が血だらけのヴェル君を抱いていたから

響

「前ここに居た憲兵さんに撃たれたらしいんだ!明石さん助けて!!」

明石

「任せてください!必ず助けます!」

数時間後

明石

「銃弾は摘出しました、そして奇跡的に急所が外れてましたので何とか大丈夫です。」

そう聞いて私は安堵した

響

「良かった、」

明石

「それにしてもこれは一体なにを使ったんでしょう」

シロナ

「うーんこれは7.62mmね、銃は、」

???

「それは多分FALだよ」

シロナ

「誰!？」

???

「そう怖い顔をしないでくれよシロナ、ネロだよ、ネロ」

シロナ

「なんだネロか、で、それは本当なの？」

ネロ

「ああ、本当さ僕は見たからね」

シロナ

「そう、」

ネロ

「でも、何故ヴェルを襲ったんだろう？」

シロナ

「それが分からない」

加賀

「あの、それには私に心当たりがあります、」

ネロ

「それは本当かい？」

加賀

「ええ、だって前の提督を追放したのは、彼ですから」

ネロ

「なるほどねえ要は逆恨みか、」

そう話していると明石さんに呼ばれた

明石

「シロナさん、ネロさん、提督が呼んでいます」

シロナ×ネロ

「わかった」

医務室

ヴェル

「先輩、」

シロナ

「先輩だよ、後輩」ぽたぽた

ネロ

「ヴェル大丈夫かい？」

ヴェル

「大丈夫じゃない、」

ネロ

「だろうね、それで話ってなんだい？」

ヴェル

「それは、ゲホツゲホツ、、この鍵を、」

後輩は何かの鍵を渡した

シロナ

「これは？」

ヴェル

「僕の武器庫の鍵、、、そして、、、その武器庫に、、、金庫がある、、、そのパスは、、、467と、579、、、」

シロナ

「でも何故？」

ヴェル

「先輩達は、、、乗り込むんでしょ？」

シロナ

「・・・後輩には敵わないな、、、」

ヴェル

「それにこれも、、、」

そうやって彼は愛用のナイフと、愛用のUSPを渡してきた。

シロナ

「後輩、、、貴方、、、」

ネロ

「ヴェル貴方、、、」

ヴェル

「お願い、、、持って行って、、、」

シロナ

「わかった、、、」

ネロ

「必ず仇を打つ」

続く

デルタチーム崩壊の元凶

提督が襲撃されて、数日がたった今はまだ場所すら把握できてない

シロナ

「くそーなんで敵は愚か場所すら特定できないんだ！」

私は怒りのあまり机を叩いた

ネロ

「シロナ少し落ち着け、イライラしたって状況は変わらないんだから。」

シロナ

「わかってるわかっているけど、」

ネロ

「私だって少しイラついている、大事な後輩を傷付けられたんだから。」

その時ドアが開かれた

大和

「お二人共、お話があります！はあはあ」

大和が息を切らせて来たのである

シロナ

「どうしたんですか大和さん!？」

大和

「場所を特定するためののはあはあ、偵察機がはあはあ、全機、撃墜されました。」

ネロ

「なるほどねえ、もう少し高高度を飛べる飛行機が必要かもね。」

大和

「どういうことですか？」

ネロ

「その付近にSAMがあるかもね。」

大和

「SAM?」

ネロ

「簡単に言うとお空ミサイル。」

シロナ

「なるほど、なら、あそこに連絡取ってみますか。」

私はスマホを取り出した

ネロ

「あれ？シロナそれ君のじゃないよね。」

シロナ

「これは後輩君のだよ。」

ネロ

「やっぱり。」

シロナ

「まあいいでしょ。」

ネロ

「後でちゃんと謝つときなよ。」

シロナ

「はいはい」

後輩の電話である鎮守府の提督に電話をかけた

数分後

???

「わかりました今すぐそちらに行きます。」

シロナ

「よろしね。」

私は電話を切った

そして、数十分後

ホーネット

「本当にここでいいのね提督。」

???

「アタイが言うんだから間違いないよ。」

ホーネット

「そうね。」

有上鎮守府執務室

夏夜月

「注文の多い鎮守府から来ました夏夜月です。」

シロナ

「夏夜月さんご多忙の中ありがとうございます。」

夏夜月

「いえいえ、大事な後輩提督を傷付けられたら黙っちゃいられませんよ。」

ホーネット

「でも、何故私を呼んだの？そつちに空母が居るじゃない」

シロナ

「艦載機が全機撃墜されたの。それで陸軍の大型偵察機を借りただけど護衛がないと心配なの」

ホーネット

「なるほど、つまりは護衛をお願いしたいと言う訳ね」

シロナ

「どうかお願いします」頭を下げる

ホーネット

「Off course任せて」

シロナ

「ありがとうございますネロそろそろ偵察に行くわよ」

ネロ

「いつでも行けるよ」

シロナ

「よし、後は青葉カメラは持った？」

青葉

「はい！もちろんです！」 遠距離望遠カメラを持っている

シロナ

「よし出撃!!」

ホーネット

「艦載機発艦！」

二時間後

無線から大和の声がする

大和

「もうそろそろです！」

ネロ

「わかった、青葉お願い」

青葉

「わかりました！」 パシヤパシヤ

青葉

「撮り終わりました！」

ネロ

「よし帰還する！」

有上鎮守府

ネロ

「なるほどねえまずはEMPそして、後は武器だね」

シロナ

「それなら大丈夫これがあるし」鍵を見せる

ネロ

「そうだな、よし行こう」

夏夜月

「アタイも連れて行ってくれ必ず戦力になる。」

ネロ

「え!？」

シロナ

「大丈夫彼の实力は私が保証する」

ネロ

「シロナが言うなら問題ないなよし、なら武器庫に行くよ」

シロナ

「ええ、わかったわ」

武器庫

シロナ

「この金庫ねパスワードは、、「467」と、」

ネロ

「えっと「579」と」

シロナ

「！これは、なるほどあの子やるわね」

金庫にはスナイパーライフルPSG1が入っていた

シロナ

「ネロそっちには何が入っていた？」

ネロ

「M4カスタムにアンダーバレルショットガン、ダブルファストマグにホロサイト」

シロナ

「あの子すごいわね。」

ネロ

「ああ、流石後輩だよ」

シロナ

「よし行きましょう」

ネロ

「ああ、待っているクズ野郎共」

例の場所

元憲兵

「あいつを殺し損ねたからな次はどうする？」

元憲兵2

「次は絶望させてから殺すのは？」

元憲兵

「いいなそれ！」

元憲兵2

「はっはっはっ！」

元憲兵

「はっはっはっ！」

元憲兵2

「はっ！」（肺の辺りに風穴）

元憲兵

「な！敵襲！」

警報がなる

シロナ

「よし混乱しているわね夏夜月さんネロ突入するなら今よ！」

ネロ

「ああわかつてる」

夏夜月

「やりますかね」

ネロ

「オラオラ！クソ野郎共！」

元憲兵

「な！迎え撃て！」

ネロ

「当たらないよ雑魚が」

元憲兵

「な！」

夏夜月

「来い！ようじんぼう！」

そう言うのと彼の体は全く別の物になっていた

ネロ

「!?」

夏夜月

「我が友を傷付けたことを永遠と後悔させてくれる」

元憲兵

「ひー！化け物！」

夏夜月

「ふん！」

元憲兵

「ぎゃーーー！」

元憲兵

「お、俺は逃げるぜ！」 船で逃走

大和

「逃がしません！」 46cm三連装砲一斉射

加賀

「あれで最後ね。」

大和

「ええ、帰還しましよ、ゝゝ！」 艦装で、防ぐ

あまりの威力で艦装が凹む

シロナ

「大和大丈夫!?!」

大和

「問題ありませんこれくらい」

???

「流石戦艦固いな」

シロナ

「誰だ!」

ネロ

「お前は」

僕が見たのはあいつだった

ネロ

「ロベルト・バルロック」

シロナ

「知っているの？ネロ」

ネロ

「最強にして、最狂の兵士そして、デルタを崩壊させた張本人」

シロナ

「！」

ロベルト

「ほう、よく知っているなお嬢ちゃん褒めてやる」

ネロ

「それはどうも」

ロベルト

「だが生きては帰さない！」ネロに殴り掛かる

大和

「させません！」46cm砲を放つ

ロベルト

「くそまだ本調子じゃないな、うぐう」気絶

加賀

「今のうちに！」

皆

「はい！」

続く

トラウマとの再対峙

シロナ

「なんか帰ってこれたわね」

ネロ

「ああ、少しゆっくりしたいな。」

大和

「提督は大丈夫でしょうか、」

夏夜月

「彼なら多分大丈夫でしょ。なんかそんな感じがする。」

ホーネット

「貴方の勘は結構当たるから大丈夫そうね」

加賀

「そう、なら貴方を信じます。」

有上鎮守府医務室

シロナ

「ただいま後輩」

ヴェル

「おかえりなさい先輩」

ネロ

「幼児化治った様だね」

ヴェル

「はい、治りました」

シロナ

「それは良かったそして、後輩少し真剣な話がある」

ヴェル

「はい」

ネロ

「ある場所で、元憲兵どもを排除した、そして、、、」

シロナ

「奴と対峙した、、」

ヴェル

「奴？」

シロナ

「ロベルト・バルロック」

ヴェル

「！」

僕はその名前を聞いて固まった

ヴェル

「そいつはどうなったの？」

シロナ

「復活が早かったとか、何とかで気絶したわよ」

ヴェル

「そう、、！ってことは死んでないの!？」

ネロ

「加賀さんが、艦攻艦爆全機使って攻撃したけど、、」

ヴェル

「それでもあいつは死なない！あいつは深海棲艦を取り込んだ奴なんだ！」

シロナ

「な!!」

ネロ

「そんな！馬鹿な！」

ヴェル

「皆が出撃してる時に夢を見て、それで全部思い出した。あいつは金に目が眩み俺のチームを崩壊させた！」

シロナ

「・・・」

ヴェル

「そして、あいつは、」

その時広場から爆発音がした

シロナ

「何事!？」

その時間聞き慣れた声があった

ロベルト

「発信機をつけておいて正解だったぜ。」

ネロ

「くっ！」

シロナ

「どうする？ 後輩」

ヴェル

「あいつと決着を付ける！」

後輩の目は決意の炎が宿っているように見えた

シロナ

「わかった、後輩、これを」

私は後輩に預けられた蒼いブレードのナイフと黒いUSPを渡した

ヴェル

「ありがとう先輩」

僕はそれを受け取り鎮守府の広場に出た

ロベルト

「ほう、あの時にくたばっていたかと思っていたが、まだくたばっていないようだな。血に
飢えた人狼」

ヴェル

「そういうあんたもな、最強で最狂の兵士、ロベルト大司令」

ロベルト

「ほう、俺のことを覚えてくれてたんだね。嬉しいなあ」

ヴェル

「そういうあんたも、よく俺のことを覚えていたな、」

ロベルト

「ああ、あの時に殺せなかった顔をよく覚えているよ絶望をしていたお前のあの顔をw」

ヴェル

「ちつ、クソ野郎が」

ロベルト

「さてと、決着を付けるぞ人狼!!」

ヴェル

「ああ、決着を付けるぜ!クソ野郎が!!」

その瞬間ナイフを抜きロベルトに突撃していった

ロベルト

「バカ正直なのは変わらないな!人狼!!」

続
く

トラウマとの決着

ロベルト

「お前はバカ正直なんだよ!!」

ヴェル

「うぐっ、」

俺の腹に衝撃が走る

ヴェル

「ゲホツゲホツ」

ロベルト

「お前は正直過ぎるこのままじゃあまたあの時と同じになるぞw」

ヴェル

「クソが、」

俺はロベルトにUSPを撃った

ロベルト

「当たらないな。」

ヴェル

「な!？」

拳銃の弾を避けた!?

ロベルト

「無駄だよ、貴様は私に勝てない!」

顔に蹴りを入れようとしてきた為顔をガードした

ヴェル「ぐっ!!」

重すぎる

ロベルト

「ほう、あれを耐えたかだが、もう終わりだ」

ヴェル

「まだ、終わらない!」

俺はロベルトの足にナイフを突き立てた

ロベルト

「ふん、雑魚が、そんなの痛くも痒くもない。このまま死ぬ」

そうして、ロベルトは腹に蹴りを入れようとした

シロナ

「させるか!!」

その声と共に、空気を切り裂くように、耳をつんざく銃声が聞こえた

ロベルト

「ふん、当たらない!」

シロナ

「スナイパーライフルの弾も避けた!?!」

あまりの事に先輩も、驚いているようだ。

ロベルト

「眠れ!」

シロナ

「がはあ、」

先輩が大きく吹っ飛ばされた

ヴェル

「先輩!!」

ロベルト

「ほらほら、早くしないと皆死ぬぞw」

ヴェル

「・・・ッ！」

足が動かない、その原因は分かっている奴に恐怖を感じていたのだ

ロベルト

「死ね。」

ヴェル

「あつ、あつ、」

恐怖で、動けない、その時に、横から

???

「後輩!!」

と声があった。その瞬間俺の体は横に吹っ飛ぶ

ヴェル

「シロナ先輩!!」

俺は先輩に庇われたのだ

ヴェル

「先輩!!先輩!!」

シロナ

「ごめんね、後輩、」

ヴェル

「先輩!!目を覚まして!!先輩!!」

先輩は目を覚まさなかった

ロベルト

「バカな奴だ、こいつを庇わなかったら。こうもならなかったのにな。」

ヴェル

「あつ、あつ、」

ロベルト

「死ね!!」

その時俺の体は鎮守府の壁に叩きつけられた

ヴェル

「うっ、っ、」

ロベルト

「これで終わりだ。人狼」

俺に銃が向けられる

???

「させません!!」

声がした

ロベルト

「ぬー！」

ロベルトはバックステップでその攻撃を回避した

ロベルト

「チッ！めんどくさくなってきたな」

大和

「貴方の相手は私です！」

ヴェル

「大和さん、、、やめて、、、」

大和

「46cm三連装砲斉射！」

当たったか分からない

ロベルト

「当たらない。」

大和

「くっっ！」

ロベルト

「あまりほかの所に気を取られるな」

いつの間にか私の前に居た

ロベルト

「ふふふはははは」

大和

「ぐっ、っ、」

ロベルト

「このまま死ね戦艦大和！」

俺はそのまま首を掴む力を強めた

大和

「あぐっ、」

ロベルト

「死ね!!」

大和

(今なら当てられる!!)

至近距離で46cm三連装砲を放った辺りが爆煙で包まれる

ロベルト

「作戦は良かったのだが貴様の負けだ！」

大和

「提督！！」

爆風でわざとヴェルに近づいたのだ

ロベルト

「これで本当にさらばだ。人狼」

一発の銃声が鳴り響く

ヴェル

「あれ、何故、、、」

俺は死んでいなかった、その理由はすぐに分かった

ヴェル

「響！！」

響が俺の盾になっていたのだ

響

「司令官ごめんね、、、ゲホツゲホツ」吐血

その光景を見てあの記憶が蘇る

デルター

「キャプテン、、、ゲホツゲホツ、生きてください、、、」

ヴェル

「いや、俺らはチームだ絶対に助ける！」

デルター

「行つてください、、、」

そうあの時のデルタ崩壊のあの記憶が

ロベルト

「これで分かったただろ、貴様は誰も守れない！」

また一発の銃声

大和

「うぐっ！」

ヴェル

「やめろ、、、」

そして、また一発

臯月

「うっ！」

ヴェル

「やめろ、！」

また一発また一発とその弾丸は仲間を奪って行く

ヴェル

「やめろおー！ー！！」

ナイフを持ち直しロベルトに突っ込む

ロベルト

「ふっ、」

だが避けられた

ロベルト

「だから無理なんだよ、貴様には！！」

背中を殴られる

ヴェル

「がはあ！！ゲホッゲホッ」

体中に激痛が走る

ヴェル

「はあ、はあ、」

ロベルト

「さて、奴らに終止符を打つか、このまま有上鎮守府を破壊する。」

ヴェル

「はあ、はあ、」

視界が霞む

ヴェル

（ごめん皆、俺は誰も守れなかった。）

???

（ヴェル貴方は本当にそれで、いいの？）

ヴェル

（嫌だ、このまま皆が死ぬのは嫌だ！）

???

（なら、抗え！貴様のその運命に!!）

ヴェル

（でも、もう無理だよ、体が動かないし、冷たくなって来ているし）

???

（大丈夫貴方にはあの人に無いものがある。）

ヴェル

(あいつになくて、僕だけにあるもの)

その時間き慣れた声でした

臯月

(司令官には僕達の絆がある)

涼月

(そうです提督には私達との絆があります)

ヴェル

(でも、どうすれば)

加賀

(その絆を力に変えるんです)

明石

(貴方ならできますよ)

ヴェル

(絆を力に)

大和

(提督には必ずできますよ)

響

(お願い司令官)

皆

(必ず勝って!!)

その声を聞いた瞬間

霞んでいた、視界が白くなった、白くなったと言うより、眩い光が私を包み込んでいく。その光は僕のナイフとペンダントが共鳴して光っていた

ヴェル

「真名解放」

ロベルト

「な!?!」

ヴェル

「甦れ、世界にその名を轟かせし伝説の戦艦よ、来たれ我が希望の象徴夢幻戦艦大和!!」
光が一気に晴れる、光が晴れた瞬間奇跡が起きた

自分の傷、そして仲間達の傷が治っていた

響

「傷が、」

臯月

「治つてる！」

ロベルト

「クソ、俺の計画は完璧だった。なのに何故だ！」

運命と言うものは分からないものである

ロベルト

「クソ！ 奴さえやれば所詮あいつはナイフしかない！」

ロベルトは俺に突っ込んできた、それとタイミングを合わせるように、顔に向かって
回し蹴りをした

ロベルト

「ぼへえ！」

ヴェル

「来い、宝剣クラウディアス」

光の中から、青薔薇のように美しい剣が出てくる

ロベルト

「ひっ！」

ヴェル

「ロベルト大司令これで終わりだ」

ロベルト

「くっ！ナメるな!!」

拳銃を放つが左にブレて、顔に当たらなかつたが、銃弾で眼帯を止めていた紐が切れ、地面に落ちた

ロベルト

「・・・ッ!」

目が紅い目が治っていた

ヴェル

「俺の鎮守府から出てけ!!」

腹に剣を突き立てそのまま空中に放り空中で、46cm三連装砲を放った。

そしてロベルトの体は灰になった。

ヴェル

「はあはあ、やった、勝つ、、、た、、、」バタン

まるで糸が切れたように俺は倒れた。最後に響達の声だけが聞こえた

響

「シロナさん司令官は、、、」

シロナ

「大丈夫気を失っただけだから。」

その後ヴェルは回復したそしてまた戻ったのだそういつもと変わらない皆の笑顔溢れるあの生活と、、

t o b e c o n t i e d